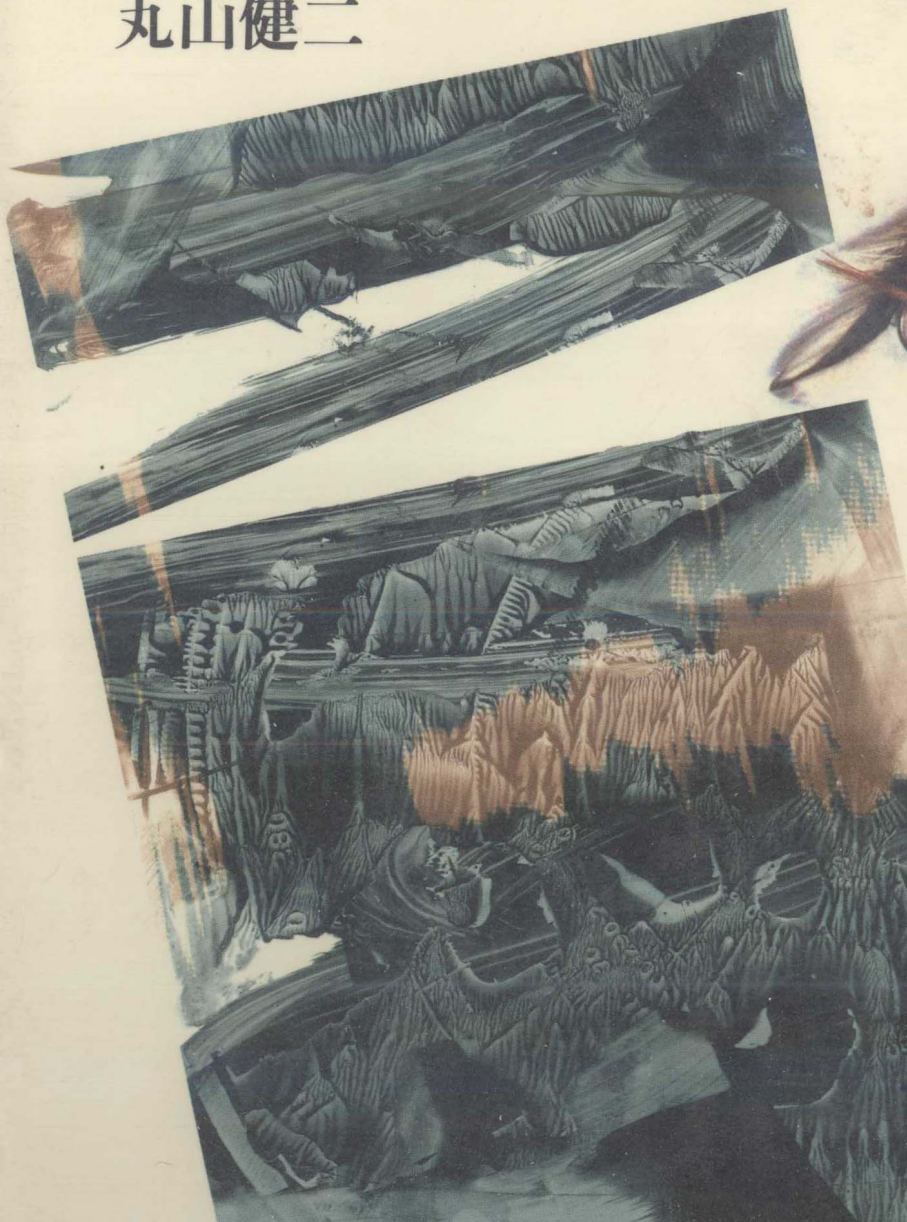


ときめきに死す

丸山健二



ときめきに死す

丸山健二

文藝春秋

ときめきに死す

一九八二年九月三〇日 第一刷

定価 九八〇円

著者 丸山健二

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二二三
電話 (〇三) 二六五—一二一一

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

ときめきに死す

装 幀 中島かほる
カバー絵 倉本 修

☆

いつしか空は雨氣づいており、夏の残炎にすっぱりと包みこまれたこの田舎町は、光と影とを急速に失ってゆく。そして、円形広場にたむろしていた人々がまだそれに気づかないうちに、いきなりどしゃ降りが始まる。客待ちをしていたタクシーの運転手たちは一斉に窓を閉め、旅行者は慌てふためいて駅の待合室へ駆けこみ、ほかの通行人はアーケード街へ向って走って行く。そうした小さな混乱がひとしきりつづいたあと、ほどなく町は落着きの方向へと傾いてゆく。

人々はもはや沛然と降り出した雨に驚いていない。わざわざ立ちどまってまではの暗い空を仰ぎ見る者はひとりもない。アスファルトの路面や色とりどりの屋根をはげしく叩く大粒の雨は、いたるところに瀾漫していた暑熱と砂埃りをみるみるうちに鎮め、洗い流してゆく。しかし、もう夏の雨ではない。降り方にむらがなく、旋風も迅雷も伴っていない。

私はエアコンのスイッチを切り、エンジンもとめてしまう。それから、雨が入りこまない

程度に、運転席側の窓を僅かに開ける。大気はまさしく九月のものだ。ぐったりしていた街路樹の葉が蘇生の息吹きを取り戻し、助手席で喘いでいた犬も、今では長い舌を引っこめて

いる。

私はむく犬に向って言う。

「もうしばらく待とうや」

飼われて三日しか経っていないのに、その牡犬はすっかり私になついている。飼うつもりはなかった。湖畔の雑木林のなかでぼったり出くわして以来、つきまとい離れようとしな

いのだ。頭を軽くひと撫でしてやるとついてきて、残飯を与えるとががつ貪り食い、そのまま居ついてしまった。

中型の雑種で、体はひどく汚れていたが、本革の立派な首輪をつけていた。思うに、ひと夏のベットの役目を果し終えたあとで、気紛れな別荘族に置き去りにされたのだろう。あるいは、自由と刺戟を求めて脱走してはみたもののどうにもならなくなって、新しい飼い主を捜していたところなのかもしれない。

私は犬に名をつけていない。つけようとも思っていない。いずれは私も棄てなければなら

ないのだから。この初めての土地へきてから五日しか経っていないが、滞在するのは長くて

もせいぜいあと一週間だ。場合によってはもっと短くなるだろう。目的は避暑や観光などで

はない。そんな身分であつたためしはこれまでにただの一度だつてない。「半月以内にすむ簡単な仕事だよ」とSは事もなげに言った。私は目下その仕事をしているところだ。

いつでもきちんと立場をわきまえているおとなしい犬だ。吠えたり唸ったりする声をまだ聞いたことがない。かれこれ一時間近くもひとところにクルマを停めているのに、退屈した素振りをまったく見せないし、その間にも犬や猫が通りかかったが、挑発的な反応は示さなかった。黙りこくって窓の外や私の顔を眺めている。見かけよりは歳をくっているのかもしれない。人間でいえばちょうど私と同じくらいで、寿命の半分ほど生きてしまい、感動の数が極端に減ってきているのかもしれない。

降りしきる雨を見やりながら、私は辛抱強く待ちつづける。たしかに仕事の内容は簡単だ。Sの指示に従つて動くだけで、自分ではほとんど頭を使わなくていい。しかし実際には気がかりなことだらけで、私はのべつ考えている。そして、いささか後悔もしている。引き受けなければよかった、としばしば胸のうちに呟く。

今朝早く、山荘のトタン屋根が太陽の直射を受けてビシビシという音を立て始めた頃、電話がかかってきた。Sはいつもの穏やかな口調でこう言った。きょうの正午から一時にかけて、広場の隅にクルマを停めて待つように、と。私は今そうしている。男がひとりやってくるというのだが、しかし名前はおろか風貌や年格好きさえも教えてもらっていない。「そいつ

の面倒をみてやってくれないか」と言ったあとSは、待ち合せの場所と時間を繰り返し、私には喋らせないで一方的に電話を切った。

その男のことはすでに聞いている。仕事の内容について私がたずねたとき、Sはこう答えた。あるところである男の身のまわりの世話をしてくれればいい、と。私が知っているのはそれだけで、ほかのことは一切教えられていない。疑えばきりがいいこのうさん臭い仕事をなぜ引き受けたのか、実は自分でもよくわからない。たぶん法外な報酬につられたのだろう。耳にした途端その金額が頭のなかで渦を巻き、今も尚変らない勢いでつづいている。だが、それだけの理由ではないように思えてならない。

Sは果してどこまで本気なのだろうか。この程度の仕事に間違いなくそんな大金を支払ってくれるのだろうか。私のどこにそれほどの価値があるというのか。大いに怪しんだ私は矢継ぎ早に質問を浴びせたが、彼は「信用してもらえないんだよ」の一点張りだった。

私を前にして坐っているときのSは充分に信じられた。しかし彼が帰った途端に、何もかもがいんちき臭く思われるのだった。相手が学生時代の知人とはいえ、十七年ぶりに突然訪れた男の話をう呑みにするほど私は若くない。だが、一蹴できる歳でもなかった。これがもし五年後に持ちこまれた話なら、絶対に手を出さなかっただろう。Sが「何も聞かないでくれないか」と言った段階で、きっぱりと断わるに違いなかった。現在私は彼を半分、いや、

それ以上信じている。

夏のあいだに私の体は一段と肉が落ちて、ズボンのベルトの穴をふたつもずらさなければならなくなっている。いくら食べても体重は減る一方だったが、しかしここへきてからはいくらか持ち直してきている。比較的まともな食事をして、山と海にはさまれた避暑地の空気を四六時中たっぷり吸っているからだろう。

Sはすっかり太ってしまった。首や腹に分厚い脂肪をつけ、顔がむくんで眼はますます細くなり、普通に喋るのさえ大儀そうだった。学生の頃の体はもっと引き締まっていた、それほど汗かきではなかった。だしぬけにアパートを訪れ、パンツ一枚の姿で昼寝をしていた私の枕元に立った彼の姿は、さながら服の下に座布団をいっぱい詰めこんだ道化師だった。三回名乗られても、その無礼な訪問者が一体誰なのかすぐには思い出せなかった。

小やみなく降りしきる雨は、とうとう広場から通行人を一掃してしまう。がらんとした空間を占めているのはクルマのみだ。バスの動きはせわしなく、どれも入ってきたかと思うとすぐに出て行ってしまふ。雨のせいでタクシーの出入りも活発になっている。じっとしているのは私のクルマだけだ。駐車禁止の場所なのだが、さっき近くを通りかかった警官はこっちを見ようとさえしなかった。何よりも観光を優先させている町だからだろう。私はのべつワイパーを作動させ、多大の注意を払ってあたりを見回している。雨を横切ってこっちへ近

づいてくる男がいなかどうか、八方に気を配っている。

むく犬は眠っている。この犬は助手席にしか乗れたがらない。男がきたら後の座席に坐ってもらうしかない。はるか洋上で準備された雨雲は、町の上空に居坐ってしまった。たぶん地雨となって夜半まで持ち越されるだろう。だが、私にとってさほど不都合な雨ではない。クルマの外へ出なければならぬ用事は、午前中に全部片づけてしまっている。買物はもうすませた。二日分の食料と夜具一式——山荘にはひとり分しか用意してなかったのだ——がトランクのなかにおさめてある。冷凍食品やなま物はドライアイスを詰めたクーラーバッグのなかだ。あとは男を乗せて帰ればいい。

私が承知したとき、Sはこう言った。もし誰かに身分を訊かれた場合には、山荘の管理人だと答えてくれ、と。そしてその日の夕方には、彼の部下らしい若い男に、地元のナンバープレートをつけた地味な色と形の乗用車を私のアパートへ運ばせたのだ。夜になってふたたび現われたSは、私にさまざまな物を渡した。山荘の鍵、道路地図、名刺——それには私の名前と、山荘の持ち主である会社の名や電話番号が印刷されていた——、あとは「これで賭ってくれないか」と言ってぎっしり札が詰まった大型の財布をよこした。「足りなければ送金するよ」とも言った。彼にとってはどうかわからないが、私にしてみれば大金だった。彼を半分ほど信じる気持ちになったのは、そのときからかもしれない。財布はダッシュボード

の奥にしまつてある。クルマから離れるときには尻のポケットに押しこまれ、眠るときにはベッドの下だ。

依然として近づいてくる男はいない。それらしい男は、立ちどまってこっちの様子を窺っている者は、周辺のどこにもいない。しかし、まだ時間はある。一時になるまでには数分ほど残っている。列車でくるのだろうか。あるいは、バスを利用してくるのだろうか。あるいはまた、私がここへきたときのように、自分でクルマを運転してくるのだろうか。いずれにしても早くきてもらいたいものだ。待ちくたびれた。

私は覚悟している。たとえどんなに扱いづらい男がやってこようとかわまない。酒乱や病気持ちの男でもいい。僅かのあいだの辛抱だ。「会えばわかるよ」とSは言った。彼はそうやって私の質問を悉くはぐらかし、挙句に「何も知らないほうがお互いのためだと思うんだが、どうだろう」などと呟いて、それきり口をつぐんでしまった。二者択一を迫る彼の沈黙は長いことつづき、やがて私は答を出した。断わるためのしっかりした理由が最後まで見つからなかった。彼は「急いでいるんだよ」と幾度も言って、じっくり考える時間を与えてくれなかった。

Sについて私はほとんど何もわかっていない。赤の他人と変りはない。同じ大学へ通っていたのは事実だが、あの頃も私たちには付き合いがなかった。挨拶や雑談程度の会話なら交

したかもしれないが、それ以上の関係はなかった。夜を徹して酒を呑んだこともなければ、いっしょに旅行をした覚えもなく、また、金の貸し借りをするような仲でもなかった。彼は目立たない学生のひとりで、口角泡を飛ばしての政治的な議論が始まったときでも決して加わらなかった。当時彼と親密だった者はまずひとりもいなかったはずだ。

卒業してからのSがどんな十七年をくぐり抜けてきたのか、私は知らない。彼がどうやって運転手付きのクルマを乗りまわせるようになったのか、まったく知らない。私が住んでいる木造アパートを訪れたとき、彼は黒塗りのセダンでやってきた。スーツ、腕時計、ネクタイ、靴、彼が身につけていたのはどれも尋常な品ではなかった。

Sのほうでは私のことを実に詳しく知っていた。三年前に突然会社勤めをやめてしまったこと、アルバイト程度の仕事しかしないのでらぶら過していたこと、そのために妻子が出た妻が現在どこでどんな生活をしているのか、そして、彼女が再婚した相手の年齢や職業や出身地、更には子どもたちが通っている学校に至るまで、彼は事細かに教えてくれた。いささか気色ばんだ私を無視して、彼はこう言った。思いつきで頼んでいるわけではないことをわかってもらいたい、と。

「お互い歳をとっちゃったな」と彼は帰り際に言った。「誰だって本当はあくせく働きたく

ないよ」彼は狭くて急な階段をのろのろとおりて行った。「しかし、生きている以上はそうもゆかないしな」

Sを乗せたクルマは、夏休みだというのに路地で遊ぶしかない近所の子どもたちを押しつけて、炎暑の奥へと吸いこまれて行った。

その晩私は部屋に閉じこもってビールをしこたま呑み、酔っぱらって壁に体当りをくらわせたものだ。隣りの部屋の住人から苦情が出るまでやめなかった。そうやって私は社会へ出てからの十七年間を振り返り、所帯を持っていた八年間を思い出し、無為のうちに生きた三年間を考えた。Sとの差がどこでついたかに関して、考えてみるまでもなかった。彼は頑張り、私は頑張りたくなかっただけのことだ。だが、彼は私と対等の口をきいた。生活に困っているようだから仕事を持ってきてやったのだという態度は、かけらも見せなかった。しまいには「どうか頼む」と言って頭をさげた。

今にして思えば、Sは私が引き受けることになんかの自信を持っていたのだろう。さもないければ、あらかじめ名刺を用意したり、クルマを私の名義にしたり、住民票を勝手に移したり——どうやったのかは知らないが——はしなかっただろう。そのクルマに乗っていいよ私が出発しようというとき、彼はまた報酬の件に触れた。仕事が終わったその日のうちに支払うと約束し、「よろしく」と言い、去って行く私に向って手を振った。目的地までのおよそ

四時間のドライブのあいだ、私は上機嫌だった。ひとりではしゃいでいた。つきが回ってきたのかもしれないなどと呟き、鼻歌を唱い、高笑いをした。

実際にはふたたび拘束される立場に戻っただけなのに、なぜか心は解き放たれていた。会社で働いていたときのように私の上には口出しをする者がいるというのに、晴れ晴れとした気分だった。その仕事を始めるやいなやいっぺんに充実が甦ったのだ。どうしてなのかわからない。所詮私は、自分ひとりでは生きるすべを知らない男だったのかもしれない。それまでの三年のあいだに考えた最も具体的な人生設計はいえ、漁船の乗組員としてはるか南方の海へ出て行くことではなかった。冷凍室がマグロでいっぱいになるまで帰れないような荒くれた船に乗ることが、ただひとつの夢になっていた。

しかし夢想を重ねるだけで、漁業会社にあたってみたり港まで出かけたりすることはなかった。失業保険の金をあてにし、出来のわるい学生にでもやれるアルバイトをして、「いつかきつ」とか「そのうちにならず」とかの言葉を胸のうちで繰り返しながら、およそ千日を過ぎた。その間妻は私に見切りをつけ、ふたりの息子連れて実家へ帰って行った。外から帰ってみると部屋には誰もおらず、嫁入り道具として彼女が持ってきた家具や衣類などがそっくり消えていた。何日も前から計画してやったことだろう。

今の私は少し違っている。勤め人の頃の私に戻ったかどうかは定かでないが、ともかく張

り切っている。ろくでもない仕事であるのを百も承知で、Sのために働いている。自分が大した男でないことを否定はしない。小者であることを認めて、それらしく振舞うのもわるくはない。

☆

時間は雨のためにすっかりかき乱されてしまっている。もはや太陽の気配はどこにもなく、光は薄れてゆくばかりだ。腕時計とクルマの時計とを見比べてから、広場の中央にあるけばばしい花時計に眼を向ける。どれもかっきり一時を示している。

そのとき、眠っていたむく犬が突然起きあがる。低い唸り声を発して振り返り、狭い助手席で素早く体を半転させ、きつと身構える。誰かが後の左側の扉を開けようとしている。ロックされていることに気づいた男——雨で窓が濡れていても、それが女でないことくらいはわかる——は、次にガラスをこつこつと叩いて私の注意を促す。私は腕を伸ばしてロックを外してやる。男は後の座席に腰をおろし、髪や肩についた雨をハンカチで拭いながら、「お願いします」と言う。礼儀正しい静かな口調だ。

だしぬけに現われたその男は、想像していたよりもずっと若い。私よりも年上で、気難しい顔つきの男がくるのではないかと思っていたのだ。むく犬はまだ唸り声をあげており、少

しも警戒を緩めていない。まるで攻撃の合図を待っている警察犬のようだ。私はエンジンをかけ、ハンドルを幾度も切って広場の中心へと出て行く。急ぐ必要などまったくないのに、私はひどく焦って町を抜け出そうとしている。犬もだが、私もまた緊張している。男がやってきたことで、この仕事によりやく真実味が増してきた。もはや半信半疑ではない。

むく犬は後を向いたまま男から片時も眼を離さず、唸りつつづけている。それほどまでに敵意を示すのは初めてのことだ。夜中に山荘のまわりをうろつく若い男女に気がついたときでさえ黙っていたのに、今では鼻に皺を寄せ、牙をむき出して相手を睨みつけている。思いのほか役に立つ犬かもしれない。

運転に専念している私は、男の顔をまじまじと見ることができない。バックミラーを覗きこめばどんな男なのかはつきりして、顔形や服装くらいすぐにわかるのに、私はそうしない。じろじろ見たのでは失礼だという意味ではなく、また、いずれわかることだというのでもない。どうしてもそっちへ視線を投げられないのだ。肩や腕に余分な力が入っている。

若い男が乗りこんできたのは承知しており、そしてたしかにはつきりと見たにもかかわらず、すでに人相を忘れてしまっている。身なりさえも覚えていない。不意に男が現われたことで、いささか取り乱しているのかもしれない。顔を真っすぐ前に向けた私は、対向車や信号機の変化に絶えず気を配っている。いくらか落着きを取り戻したのは、町を抜け、山の別